

森敦訳

尾崎紅葉

金色夜叉



明治の古典2

尾崎紅葉

金色夜叉

森敦訳

金色夜叉

森敦訳

5

口絵

6

前編

12

カルタ会

13

夜更けの木枯し

19

女のこころ

21

甘露の夢

24

縁談

29

思案

32

熱海梅林

37

今月今夜

41

中編

46

栄誉

46

横恋慕

50

子爵邸

53

双眼鏡

56

奇遇

59

招かれぬ客

64

人にして人にあらず

69

饗宴

74

夜寒

77

暴漢

79

後編

82

雪もよい

82

夫の帰宅

86

愛憎

89

名刺

94

狂女

100

焦土

105

続編

110

街頭の椿事

110

女の覚悟

114

冷淡な妻

117



注釈 岡保生
写真 吉岡勇

やるせない心 120 焼け跡の新居 123
 闇入者 128 夜の牡丹 130 落花狼藉 132
 憎し口惜し 136 暁の夢 141 不俱戴天 125

訳者覚え書

森 敦 145

夢二の描く金色夜叉

26

金色夜叉初の新聞さし絵

梶田半古画

98

熱海と紅葉と金色夜叉

166

特集口絵 金色夜叉と明治の風俗

木村利行 149

評 伝 尾崎紅葉——達意の名文家

岡 保生 157

解 説 金色夜叉の構想

岡 保生 164

エッセイ 硯友社の人々

巖谷大四 168

エッセイ 歌留多会と金色夜叉

安西篤子 170

文学風土記 尾崎紅葉

槌田満文 174

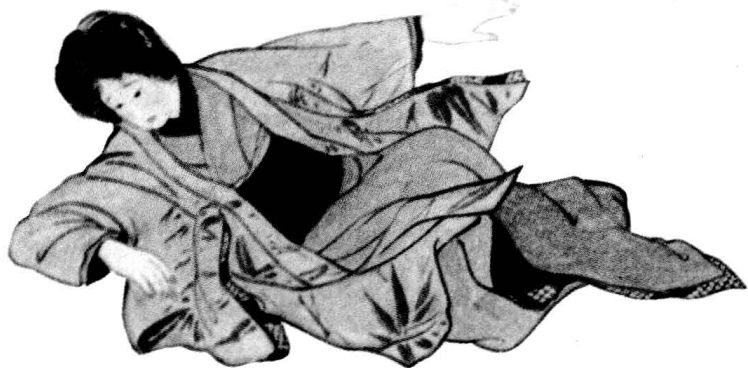
作品小事典

年 譜

木谷喜美枝 172
 木谷喜美枝 178

原文(抄)

宮は見るより驚く違もあらず (前編第八章) 43
 片側町なる坂町は軒並に鎖して (中編第八章) 81
 此心を曉れる満枝は (後編第四章) 93
 知らず、其の老女は何者 (後編第六章) 101
 磐石を曳くより苦く貫一は (続編第八章) 143
 抑も塩原の地形たる (続編第一章) 133



(50音順)

井上 靖
円地文子
尾崎秀樹
山本健吉

編集委員

扉口絵
尾崎紅葉画像

■執筆者

森 敦（作家）

安西篤子（作家）

巖谷大四（文芸評論家）

岡 保生（青山学院大学教授）

木谷喜美枝（和洋女子大学助教授）

木村利行（評論家）

槌田満文（文教大学女子短期大学部教授）

濱田義一（元熱海市立図書館長）（50音順）

■写真取材協力・提供

朝日新聞社 熱海市立図書館 有島暁子 伊豆栄
伊東正一 伊東知則 伊東みどり 伊臣第一郎
今井写真館 岩田豊樹 大塚光学 風間完 鹿児
島・尚古集成館 神奈川県立博物館 歌舞伎座
川端紀美子 京都市立芸術大学 国立国会図書館
金刀比羅宮博物館 大谷図書館 竹内碧外 竹久
不二雄 たばこと塩の博物館 土田鏡子 滴翠美
術館 東京芸術大学 東京国立近代美術館 東京
国立博物館 東京都美術館 文学座 徳岡政子
中里富美子 中沢光敏 日本通運 日本近代文学
館 日本美術家連盟 博物館明治村 濱田義一
浜松市美術館 速水弥 松井昌 松本民芸館 マ
スプロ電工 三越資料館 山種美術館 山田肇
山元清秀 横尾英夫 早稲田大学演劇博物館 早
稲田大学図書館 太田晶二郎 尾崎直衛 川村清
衛 河野通明 塩田忠 杉山浩一 武内圭太
名取功男 平山曄 柳川千枝子 立教大学図書館

■撮影

吉岡勇 高橋敏 小平忠生 春内順一
大隅隆章 原耕平 吉田克人 鈴木健夫
小野保世 小川昭憲 杉本保夫

■装幀・目次

奥野玲子

■レイアウト

島田拓史

■編集スタッフ

（編集）星瑠璃子 有働義彦 宮下襄 斎藤正憲
岡部佳子
（校正）河本久慧

■図版指導

木村利行

■写真取材

佐藤嘉孝 平林彰

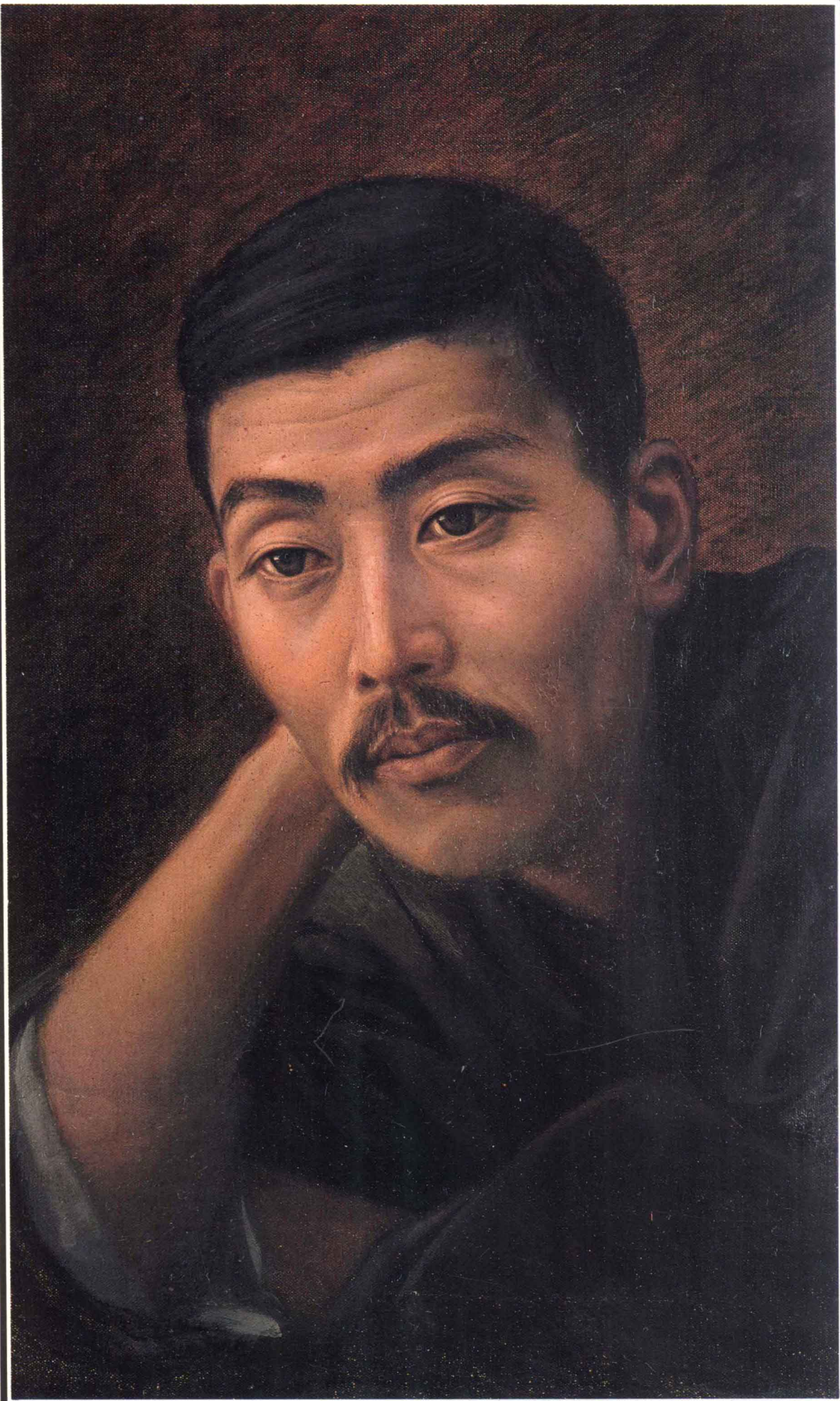
■造本管理

酒寄照男 野口元 北川昇

*掲載いたしました関連資料のうち判明いたしました著作権者
及び所蔵者の了解は、可能なかぎりいただきましたが、万
一手落ちがございましたら、編集部までご連絡下さい。

金色夜叉

森
敦
沢





熱海の海岸の貫一と宮 金色夜叉前編折込口絵

武内桂舟画 富山の許へ嫁ぐ宮の不実をなじる貫一

捨てられたものの怨みが、ひとりの男の生涯を変える。





焼け跡の直道と貫一

金色夜叉後編折込口絵

武内桂舟画

主人の鰐淵夫婦が狂女の放火に焼死し、呆然とする貫一。駆けつけた直道は真人間にと諭す。





貫一さん、許してと叫ぶ宮。差しのべる貫一の腕に抱かれたむくろの冷たさ。その肩に触れて咲くひともの白百合が気高く匂う。



入水する宮 金色夜叉続編折込口絵 錦木清方画。

金色夜叉

森 敦 沢



前編

カルタ会

箕輪家の奥は十畳の客間と八畳の間とを打ち抜いて、広間の十か所に真鍮の燭台を据え、大ローソクがと

もされ、間ごとの天井にはニッケルめっきの空気ランプが輝き、あたりは真昼よりも明るかった。あたかも、三十人あまりの若い男女が、ふた手に分かれて輪をつくり、カルタ遊びの真つ最中である。大ローソクの焰と、炭火の熱と、ひといきれでむっとするなかに、煙草の煙と燈火の油煙が立ち迷っていた。込みあつた人々の顔は火照って、女たちは白粉が薄はげたり、髪がほつれたり、着

*ニッケルめっきの空気ランプ、いん

んの周囲に穴のあいた籠のような形をしたニッケルめっきの金具をつけて、

空気の供給をよくし、したがってよく燃えてたいそう明るくなるようにくふうされたランプ。

*カルタ遊びの真つ最中 一八九七年（明治30）ごろの正月のカルタ

会は、「男女七歳にして席を同じうせず」の当時にあつては、青年男女の社交の場でもあつた。



くずれたりしている。男たちもシャツの腋の裂けたのも知らず、チョッキばかりになっているものもある。羽織を脱いで帯のつけたのも気づかず尻を突き出しているものもある。みな夢中で喜び、喚き、笑い、振じあい、どよめいて、温気も煙も気づかぬもののである。

こうしたなかに、中の間の柱側にしとやかに坐って、この騒ぎを目もと涼しく面白げに見ている娘がいた。髪は重たげに夜会結び、淡紫のリボンを飾って、小豆鼠の縮緬の羽織を着ている。そのつくりから顔立ちまで水際立っている上に、媚びさえ含んでみえるので、これが素人かと疑われるばかり。たちまち人目を引いて、一番の勝負が終わらぬうちに、宮という名が知れ渡ってしまった。

袋棚と障子との片隅で火鉢を囲んで、蜜柑をむきながら語らっていた男たちがいたが、そのひとりがふと彼女の横顔をほればれと見入っていたと思うと、感に耐えないように、

「シャンだな。馬子にも衣裳というけれど、あんなのは着物などどうでもいい。いや、なにも着ていなくてもいい」

「そりゃあ、裸体ならなおいいさ」

おそらく美術学校の学生であろう、他のひとりが強くそう相槌を打った。

そのとき内儀にみちびかれ、主の亮輔を従えて、年のころ二十五、六とおぼしい紳士が仰々しくはいつて来た。みなは入り乱れてここを先途と激しい勝負の最中だったから、ほとんど気づくものはなかったようだが、片隅で語らっていた二人はいち早く目にとめた。紳士は背が高

く、ほどよく太って色が白く、頬のあたりがぼうつと赤味を帯びているが、額がひろく口が大きく顎が張っている。髪は左から分けてべったりと油で撫でつけ、薄い口髭をはやし、大きな鼻に金縁の鼻眼鏡をかけ、五つ紋の黒塩瀬の羽織に華紋織の小袖を裾長に着、七糸帯から懷中時計の金鎖をたらし、大様に面をあげて座中を見まわす。まるで光を放つようで、このまどいの中にこんな色白く身ぎれいに美々しく装ったものはいなかった。

「なんだ、あれは？」

れの二人のひとりが、憎々しげに呟くと、

「いやな奴！」

美術学校の学生らしいのが言い放って、ことさら面をそむける。

「お俊や、ちよいと」と、内儀はみなの中からその娘を手招いた。

お俊は両親が紳士を伴っているのを見ると、あわただしく立って来た。顔はよくないが、愛嬌があつて布袋のような主によく似て、福相をしている。高島田に結つて、肉色縮緬の羽織にちよつと肩揚げしているのも愛らしい。顔を赤くして跪き慇懃に頭を下げたが、紳士はわずかに小腰をかがめただけ。

「どうぞ、こちらへ」

お俊は案内しようとしたが、紳士は頷きながらもさして好ましくもなさそうなので、内儀が口を出した。大兵肥満、頭のつるりと禿げた主と違い、ひどい小女で疳のために口がゆがんでいる。

「あの、お前、結構なお年玉を頂戴したのよ」

お俊がふたたび頭を下げると、紳士はほほ笑んで頷く。

*夜会結び 「夜会巻き」ともいい、女性の髪型の一つ。片側から巻き上げて高く長く結ぶ束髪。

*小豆鼠の縮緬の羽織を着ているあずきねずみ色（赤みを帯びたねずみ色）の縮緬の羽織、というので宮の品のよさを表わす。派手なけばけばしい身なりではない。

*馬子にも衣裳 馬子のような賤しい者でも身なりを整えれば立派に見える。

*五つ紋の黒塩瀬の羽織 当時の男性の正装した紋付き羽織。「五つ紋」は、背の中央の襟の下、左右の外袖、前の肩下の左右、計五箇所に紋を染め出したもの。「塩瀬」は厚地のようこうねのある羽二重。

*華紋織 花模様のある織物。

*七糸帯 正しくは繻珍帯。もと七色以上の色糸を用いたので「七糸」と書く。絹紋織物の帯。

*ちよつと肩揚げしている 「肩揚げ」は子供の着物でゆきを肩の所で縫いあげておくのをいう。ここでは「ちよつと」とあるので、お俊が年ごろになりかけているのがわかる。



ここぞと主の亮輔が進める。

「まあ、いらして御覧なさい」

さあと内儀に促されて、お俊は紳士を客間の床柱の前の火鉢のある方へ案内した。内儀もそこまでつき添って来る。

二人は内儀がこうも紳士を丁重にあつかうのを訝り、紳士を目で追ってちよとしたことも見逃さなかった。紳士はその行くとき、左をみせてみなの間を通り過ぎたが、その薬指に眼を射るような輝きを見た。紳士は二人がまだ見たこともないような大きさの、ダイヤモンドを入れた金の指輪をはめていたのである。

お俊はカルタの席に戻るとすぐ、こっそり隣の娘の膝をついて、口ばやに囁いた。娘はすぐ顔をもたげて紳士のほうを見たが、その人よりもその指に輝くものに驚かされた様子で、

「まあ、あの指輪？ ダイヤモンドかしら」

「そうよ」

「大きいのねえ」

「*三百円だって」

お俊に言われて、娘は感きわまったように、

「まあ、いいのねえ」

娘はほんの小っちゃな真珠でもと願っていたが、それさえ叶わなかった。もしやこんなひとと思うと動悸がして、ぼうつとしている間に、すばやく手が伸びて来て、目の前の札を引っさらう。

「あら、あなた。どうしたのよ」

お俊はいら立って、娘の横膝をつづけさまに叩いた。

「いいわよ、いいわよ。これからもう大丈夫」



娘はやっとおのれに帰ったようだったが、まだ心に残るものがあるのか、もうあの目覚ましかった手なみはみられなくなった。

これがみなに伝わり伝えられて、

「なに、ダイヤモンド？」

「ふうん、ダイヤモンドか！」

「まあ、ダイヤモンドよ」

「あれがダイヤモンド」

「すばらしいわ」

「三百円もするというんだからな」

*三百円 無論、貨幣価値は異なるが、当時でも「三百円」のダイヤモンドはさほど見ばえはしなかった。当時の批評に「元来金剛石は目方物で……無疵で無色透明の品なら、三百円では一分二厘から五厘位、せめて七八百円出して三分ぐらいの指輪をはめましたら少し見ばえが有ましたらうに、紅葉先生大層御侯約で御座いました」とある（『金色夜叉上中下篇合評』）。